様々なパリの顔とミュージアム

阿子島 香

[東北歴史博物館館長講座概要：歴史博物館グローバル紀行③]

2024年6月22日

講座要旨

新シリーズでお話をします館長講座の3回目です。「歴史博物館グローバル紀行」と題し、世界各地の博物館を、皆さんと一緒に巡ります。考古学と歴史を中心にして、海外のミュージアムを訪ねて、各地の展示と郷土史を、世界史の視点から考えていきます。全8回の連続講座ですが、各回は独立した内容ですので、お楽しみください。今後の内容は、次のように予定しております。④遠洋航海者：太平洋の人々と文化史、⑤戦争の記憶をつなぐ展示と歴史観、⑥南フランスの遙かなる先史時代、⑦ネイティブ・アメリカンの世界1、⑧ネイティブ・アメリカンの世界2。「博物館学」という研究分野があり、「学芸員資格」を取得する要件として多くの関連科目の履修があります。今年の館長講座は、いわば「博物館展示論」と、「世界史の散策」とのクロスオーバーと考えていただければ幸いです。おおむね、アメリカとフランスの博物館を主にしますが、適宜ほかの国々の博物館にも触れていきます。またお話の内容では、時々、旧シリーズすなわち「東北グローバル考古学」の全24回の内容と関連させつつ、参照していきたいと思えます。旧シリーズは、引き続き東北歴史博物館のHPにて、講座概要を公開しております（多くは「読む館長講座」として、改めてエッセイとして再構成したのになっています）。あわせてご参照いただければうれしく存じます。今回は、オリンピック、パラリンピックが開催されることに寄せて、パリの博物館を取り上げてみます。ちなみにグーグルにて「パリのミュージアム」で検索してみると、たちどころに数十以上の博物館、美術館がリストになって、フランス観光開発機構HPから各館の詳細に飛ぶようになっていました。他にも観光関係各社、愛好家、メディアなどのHPやブログが、非常に多数あって、大学奉職中から数十年来の博物館マニアである館長としては、楽しいこと限りなしです。講座では、冒頭の趣旨に沿って、世界史の中でのフランス、パリに焦点を当ててみようと考え、3つの場所をご紹介します。国立考古学博物館、ケブランリ美術館、軍事博物館の展示を取り上げて、皆さんと一緒に「フランスを考える」一助になればと思います。私は1982年から何度もフランスを訪れ、バックパック旅行、発掘調査、資料分析、大学院教育、国際学術交流などに関わりがありました。撮影した写真もかなり多数ありますので、それらから選択して、適宜ご紹介していきたいと思えます。

国立考古学博物館は、パリの西郊外、RER（高速郊外鉄道）路線終点のサンジェルマン・アン・レイ駅に近く、かつての王宮の建物が博物館になっています。12世紀にルイ6世が

城を建設したことに始まります。16世紀にフランソワ1世が城を再建し、17世紀にルイ14世はここで生まれて、1689年にヴェルサイユ宮殿を建設して移るまで、王の居城でした。なおフランスの宮廷所在地は頻りに移動しましたので、断続的な年数となります。フランス革命後に荒廃した時期がありましたが、19世紀に英国ビクトリア女王がナポレオン3世に保存を要請し、フランソワ1世時代のルネサンス様式で修復されました。ナポレオン3世が1862年に考古学コレクションを城に集めたのが、博物館の起源とされます。1867年に博物館は開館して、以後の長い間、フランスの考古学研究の中核のひとつになってきました。収蔵品は200万点以上といわれ、展示室では旧石器時代、新石器時代、青銅器時代、鉄器時代、古代ローマ、初期フランク王国（メロヴィング朝）まで、代表的な優品を見ることができます。フランス考古学の概略を、至宝の数々を通して知ることができ、旧王宮の威容とともに、考古学ファンには是非お勧めしたい場所です。一角に「ピエットの部屋」が復元されています。19世紀にフランス南西部で旧石器時代研究の先駆けとなったエドゥワール・ピエットの遺志を継いで、寄贈資料を当時のままの重厚な展示方法で、復元してあります。ピレネー地方のブラッセンピュイ洞窟出土の「頭巾をかぶる乙女」も、ここにあります。

ケブランリ美術館（ケ・ブランリー・ジャック・シラク美術館）は、エッフェル塔に近く、セーヌ川左岸の河畔に立つ、モダンな建築の民族学博物館（または民族芸術の美術館）です。2006年に開館しました。年間100万人以上が訪れるということです。収蔵品37万点といわれ、オセアニア、アジア、アフリカ、南北アメリカの4部門で、研究と展示がなされています。常設展示は、現代博物館学の見本のような手法で、時間を忘れず（館長の個人的な感想です！）。建設準備当時から論議になっていたという本質的な方針（民族美術作品として扱うか、歴史的資料として位置付けるか）については、なお問題を含んでいると思いました。地域や民族を横断して並べる展示方法、民族資料が製作され、使用された文化的脈絡の分かりにくさ（民族文化全体の説明の欠落、儀礼や宗教、社会組織の不明瞭な展示など）、年代や場所の分かりにくさは、私が民族学、考古学の視点で見るとはかもしれません。一方では、美術的な観点（審美眼）が強調されていて、非常に分かりやすいともいえるでしょう。また歴史的超大国フランスが、収集資料に反映されている点も顕著です。旧フランス領の西アフリカ諸国（ニジェール川流域の国々は奴隷貿易の中心地）、ベトナムなどインドシナ（旧仏印）などの、「収蔵展示」（収蔵部分がガラス越しに見える）の物量に圧倒されます。

軍事博物館は、セーヌ川左岸にあり、アンヴァリッド（ルイ14世開設の廃兵院）の建物と一体になった大規模な博物館です。天井の聖絵画が美しいドーム教会には、ナポレオン・ボナパルトの棺（ひつぎ）が安置されていて、見学できます。広大な展示場に、古代の刀剣・盾から、中世の武具、騎士の甲冑、銃器の発達、近代戦争から現代までが対象です。戦闘の道具の実物のオンパレードで、人間の歴史は戦争の歴史という感があります。中世の騎士道文化は大きく取り上げられて、長槍の騎士の姿を復元し、さまざまな甲冑が大量に「収蔵展示」（奥行きを持って、見えるように並べ、それらが収蔵空間を兼ねるような博物館の展示手法）されています。銃器の歴史では、大量のフリントロック銃（17世紀～19世紀初期、

火縄銃と雷管式銃の間)は、日本の郷土史・文化財ではあまりなじみがなく、天下泰平と鎖国の時代の意味を実感させます。

トピックス

以上は、全体の要旨です。以下に、スライドで解説した内容から一部を選んで、项目的に紹介します。

- ・国立考古学博物館は、時代別の通史展示になっていて、いずれの展示室でも、フランスの先史・古代史を代表するような優品が並んでいる。フランス考古学の概観として一回りしたら、関心の深い部分について、写真を撮るなど時間をかけて見学するのが効果的だろう。旧王城なので、全体が壮大な建築で、周辺の環境と合わせて建物の見学も意義がある。郊外鉄道に乗り、じっくり古代文化を鑑賞し、王宮前のレストランで昼食など、よい休日になるだろう。パリジャン、パリジェンヌたちも、そのような時間の過ごし方をしている。博物館では、子供たちに分かりやすく太古の世界を説明するプログラムもあり、見学中に子供たちと学芸解説者のグループに出会う一幕もあった。

- ・講座では、旧石器時代の部屋を中心にスライドで解説。導入部、壁面美術の展示は、フランス中南部のロココソルシエ遺跡。岩陰にヤギなどの浮彫り美術(レリーフ)が残されている。クロマニヨン人の壁面美術は、ラスコー洞窟のように、彩色画、線刻画が普通なので、浮彫りは珍しい。壁面の岩石を切り取ってきた過去の調査による実物展示。

- ・旧石器時代の石器の展示は、壁にピンで止めて垂直方向に見せる方法が主になっている。これはフランスの博物館で一般的。日本では俯瞰する横置きがほとんどで、寝かせた石器を上から見る方式。講座では、ネアンデルタール人の石器(ムスチエ文化)、クロマニヨン人の石器(ソリュートレ文化、マドレーヌ文化)の各種型式を解説。フランス考古学は、石器の型式学的研究法を重視する。石器を多くの型式に分類して、年代的に編成し(編年論)、型式の比率の変化を分析(組成論)する。近年は、「型式学」に対して「技術学」が重要になってきているが(「動作連鎖論」ともいう)、この博物館では従来の伝統的な石器研究法に従った展示で一貫している。

- ・石器文化は、アシュール文化、ミコック文化、ムスチエ文化、シャテルペロン文化(下部ペリゴール文化)、オーリニャック文化、ペリゴール文化(グラヴェット文化)、ソリュートレ文化、マドレーヌ文化、アジル文化と大別されて、さらに細かく分類され、変遷がたどられる。それぞれの文化に特徴的な石器の型式の組み合わせがある。たとえば、ムスチエ文化の抉り入り石器(ノッチ)と鋸歯縁石器(デンティキュレイト)、キナ型スクレイパー、ソリュートレ文化の大形両面加工石槍、マドレーヌ文化の小石刃、背付き小石刃、エンドスクレイパー、多くの種類の彫刻刀形石器など、石器型式学をたどるだけでも大変!そして、これらを学ぶことが、石器研究の基本とされている。講座では、いくつかの事例をご紹介します。

- ・ピエット氏のコレクションは、当時の展示を復元した「ピエットの部屋」が興味深い。19世紀末の重厚なインテリア、マントルピースなどのしつらえ、オーク材の木製展示ケース、

ケースの中に敷き詰められた赤いフェルト、その上にぎっしりと並べられた石器と骨角器、世紀末の時代感が漂う一室である。ピエット氏の遺志によって、かつてのコレクション展示を、氏の分類法とともに、そのままにすることが寄贈の条件とされた。近年、以前の展示室に戻す復元リニューアルが行われた。石器の配置図などを参考に、細心の注意で復元された。有名な至宝である「ブラッセンピュイ洞窟の頭巾を被った女性像」(象牙製の頭部彫刻)も、フランス南西部やイタリアのヴィーナス像の一群とともに、この部屋の重要な展示品である。

・ピエット氏は、1827年生まれで法律を学び弁護士として活躍した。1870年の普仏戦争従軍で体調を崩し、フランス南西部のピレネー地方で温泉療法中に、先史時代の遺跡と遺物に深く関心を寄せ、調査を積み重ねた。1871年から1897年の間に、ピレネー山脈周辺の多くの遺跡を発掘した。マス・ダジル遺跡はアリエージュ県にあり、のちに旧石器時代と新石器時代との間をつなぐ「中石器文化」の標準遺跡とされた。小型の礫に彩色を施した特徴的な出土品(彩礫)で知られる。氏の調査はすべて自費によるものだったが、出土品を売却することはなく、1904年に、国立考古学博物館に寄贈された。2008年に再オープンしたピエット・ルームは、フランス先史考古学の歴史を探訪するよい機会となるだろう。日時を限定して一般公開もされている。

・ケブランリ美術館では、現代的で非常に広大な空間の中に、実に大量の民族芸術資料が展示されている。注意深く小さな文字の解説をたどれば、収集地、収集年などの情報を得ることは可能であるが、全体としての地域文化像はなかなか浮かばないという評もうなずける。講座では、おおよそその地域と民族資料のカテゴリー分類による、まとまった展示から、館長撮影(2009、2010、2011)の多くのスライドで、いくつかの部分解説した。来歴が詳細不詳での理解には難しい面もあるが、世界民族学の基礎知識によって、見学者は個々の美術品の価値を鑑賞できる。

・博物館学的には、斬新な展示手法と、古典的な優品重視の列品との融合が興味深い。導入動線では、天井から光のインスタレーション風に、民族学の用語や世界の言語などが点滅し、展示場に入る。観客を別世界に誘い入れる仕掛けである。没入型の3面スクリーンで世界の諸民族の多様性と、美術の水準の高さが訴えられる。常設展「川の流れ」では、諸民族の芸術の競演となるが如く、優品が並ぶ、などである。作品の列品では、同種の資料(民族作品)を、民族差を超えて並べる、空間配置がいわゆる「構造的」に見える、見学者が収蔵展示ケースと双方向的に関わって見学する(衣服の縦型ケースを引き出して観る)など、工夫が見える。タッチパネル方式で、それぞれの展示空間の内容に関する、より詳しい情報の提供がなされていた。小空間に座ってじっと映像で地域の文化内容に入っていける場所もある。講座では、これら事例から博物館展示の手法について、館長なりに解釈してみた。

・超大国であるフランスの、世界史的な位置が、民族芸術の品揃えに反映しているようだ。19世紀後半の、いわゆる帝国主義時代のフランス勢力圏と、展示実物資料の量と水準が、関係することが読み取れる。おそらく収蔵庫の内容とも、同様に関連しているであろう。

西アフリカ諸国に来歴がある民族芸術の作品群は、そのうちの筆頭である。かつての「奴隷海岸地帯」を含む場所である。また、インドシナ半島の沿岸から内陸まで、旧フランス領とその周辺の地域からの作品群がある。太平洋地域では、現在もフランス領であるニューカレドニアが、特にまとめて展示、解説されていた。

・ケブランリ美術館では、企画展示も重視され、世界的な特別展が順次開催されている。講座では、2010年3月のマヤ文明展から、スライドで解説した。入り口に行列ができる人気のようす、グアテマラ国立博物館から招来した優品の数々、マヤ文明の基本的性格が示されていることなどを解説した。石器の都市文明、精巧な大型石槍、形象打製石器、マヤ文字の刻まれた石製品、彩色土器の優品（やはりマヤ文字で全面装飾）、神聖なヒスイ製品と、トウモロコシ神の像など、ひとつの文明をよく描写した好展示の印象をもった。

・「平和の祭典」とも称されるパリ・オリンピックの開会式会場にもなった、セーヌ河のほとり、シャンドマルス公園の一角に、アンヴァリッド（「廃兵院」）と軍事博物館が、一体のものとしてある。ナポレオン・ボナパルトのひつぎを見学して、世界史の巨大な流れに想いを馳せたのち、古今東西の軍事技術と戦闘用具、銃器、近代から現代までの戦争の歴史を、まとめて見学するのは、人類史を再考する機会となるだろう。なぜに人間は、かく戦い続けるのか、深い疑問に囚われてしまうだろう（館長の感想）。

・日本の歴史系博物館と比較した際に、銃器の歴史で大きな相違がある。それは、フリントロック式小銃の、日本におけるほぼ完全な不在である。軍事博物館でのこの段階の銃のスライド（メカニズムのクローズアップも館長撮影）から、ひとつの時代を画した銃器について解説した。フリントロック式銃は、発射装置の岩石と鉄片を打ち合わせて、衝撃により火花を飛ばして発火させる方式である。これらはマスケット銃ともいう、銃身内部が滑腔式の銃で、らせん状の条線を刻んだライフル銃の発明に先立つ。フリントロック式の銃は、火縄銃（マッチロック式銃）と、雷管式銃（パーカッションロック式銃）との間に、ヨーロッパをはじめ世界的に大量に製作、使用されて、多くの戦争の主要銃であった。

・ところが、日本で文化財として保存されている古式銃は、火縄銃か、雷管式の銃で、幕末から戊辰戦争にかけては、各藩は競ってライフル銃の入手に奔走した。戦国時代から天下統一の時代にかけての火縄銃の時期に国産の技術革新があり、火縄銃は全国で量産された。結果、各地の城郭や歴史博物館、資料館で、甲冑と火縄銃のセット、古式砲術としての火縄銃の武道など、皆さんご承知の通り、重要な文化財になっている。なぜフリントロック式の銃が日本にほぼ皆無なのであろうか、それは、世界史の歴史上の偶然ともいえるべき流れによる。江戸幕府による天下泰平の世になってから、17世紀ヨーロッパでフリントロック式の銃が発明され、世界的に席捲したのであった。その頃の日本は、徳川幕藩体制の平和の時代であった。パクス・トクガワーナと、ローマ帝国のパクス・ロマーナ（ローマの平和）を念頭に呼ぶ識者もいる如くである。1840年頃から、世界の銃は次第にフリントロック式からパーカッションロック式に置き換わっていった。そして、幕末の動乱期を迎えた頃、世界はすでにライフル銃の時代で、銃弾の先込め方式銃か、元込め方式銃かという、新式銃の獲得競争

の時代であった。ヨーロッパでのフリントロック式銃が、これだけ普遍的に、大量に収蔵され、博物館などで展示解説されていることに、世界歴史的な非常なる偶然を感じる（館長説）。

・フリントロック式銃のメカニズムに用いられている石製の部品は、文字通りフリントという石材で、これは旧石器時代、新石器時代を通して、世界的に使用された岩石と同じものである。旧石器時代には「石刃技法」が発達して、円筒形などの石刃石核から、連続的に縦に長い石器素材を製作していた。（令和3年度館長講座で、人類史の中の石器製作技術の進化について、詳しく説明したところです。）フリントロック式銃の部品は、この石器時代の石刃の、長さが短い種類に、形と製作法の両面で酷似している。考古学の参考書で、近世の銃の部品を石器と間違わないようにとされるほどである。銃の部品は、「ガン・フリント」 Gun Flint と呼ばれ、製作を行なう専門職人も存在していた。イギリスでのガン・フリント職人の事例は、古典的な書物である芹沢長介著『石器時代の日本』（1960、築地書館）に紹介されている。

・軍事博物館の展示で目覚ましいのは、大量の中世の甲冑である（スライド）。シンボリックな展示として、長槍の騎士が、馬上にて戦闘のため、向かいあう姿がある。あるいは決闘のシーンなのかもしれない。中世の騎士と騎士道文化は、フランス人に一種ノスタルジックな感情を引き起こすのかもしれない。何十体も並ぶ甲冑は、相当な迫力をもって迫る。一角に、日本の鎧兜がセットで展示されていた。エキゾチックな雰囲気である。西洋の「騎士道」精神と、日本の「武士道」精神は、しばしば思想史において対比されてきた。

・現在まで残る「モノ」は、その国の歴史の流れの雄弁な語り手である。文化財は、単なる過去のモノではなく、現在の社会をより深く知るための、手だてなのである。

（本稿は、館長講座での配布要旨に補足したものです。）